

約30年を経た「戸台の化石」保存会・活動の紹介

北村健治*

The conservation community of Fossils from Todai at Ina city, Nagano Prefecture, central Japan :
Activity report of it for about 30 years

KITAMURA, Tateharu*

要旨

長野県伊那市長谷地区に分布する下部白亜系の戸台層・小黒川層から産出する化石を、筆者らは『戸台の化石』と呼んでいる。これらは19世紀末から産出記録のある *Trigonia* 化石と1963年に筆者が発見した *Ammonite* などの軟体動物を始め、棘皮動物のウミユリやウニ、腔腸動物、シダ植物など多種類の化石を含む。

筆者は、これらの化石を産出する地元で恒久的に保存したいと、有志や地域の小学生家族等の賛同を得て、採集者が持ち帰らずに地元の長谷に預けてもらうこと（戸台方式）を礎とする、『戸台の化石』保存会を発足させた。その後、1年に3回の学習会の企画実施、資料室の開設、機関紙「アンモナイトだより」の発行、学習会参加者確保、標本整理などを続けた。

会の発足から10年、20年と経過すると、活動初期の参加者の中には親となって、子どもを連れて再び活動に参加したり、成長して専門的な関連分野で活躍しているとの報告などもあり、これは保存会活動の大きな成果だといえる。2008年の南アルプスジオパークの日本ジオパークへの認定に際しては、「戸台層」「戸台の化石」資料室がジオサイトの1つとして組み込まれた。

今後は、2011年に採択した戸台の化石憲章と、地域地元の皆さんや有志・会員の皆さんの温かい支援によって、約30年を経た「戸台の化石」保存会の活動がさらに継続されることを願う。

キーワード：戸台の化石、保存会、戸台層

1. 「戸台の化石」とは

長野県伊那市長谷地区に分布する、下部白亜系の戸台層・小黒川層から産出する化石を、筆者らは「戸台の化石」と呼んでいる（図1、2）。

19世紀末、信州の有名な地学教育者・地質学者であった保科百助（五無齋）のもとにあった採集品の中に旧美和村字戸台あたりで産出した化石の中から、高等師範の脇水鉄五郎が *Trigonia* を発見し、高遠出身の高橋雄次郎（当時東京帝国大学工科大学学生）による確認踏査の協力を得て、地質学雑誌に「信州美和村のトリゴニヤ化石」として発表した（脇水、1899）。これにより赤石山地の西側に中生界白亜系の「三角貝

砂岩層」が分布することが明らかになった。戸台の *Trigonia* 化石はその後、矢部（1901）、保科（1903）、佐藤（1919）、Yehara（1921, 1923）、江原（1931）、Matsumoto（1954）等の研究報告の中でも紹介されて、戸台は *Trigonia* 化石の産地として有名になった。

第二次世界大戦後の新しい地下資源調査研究の一環として、1953年、東北大学の石井清彦ほかは赤石山地の地質調査を行い、この「三角貝砂岩層」を新たに戸台層と命名した（石井ほか、1953）。1963年3月31日、筆者は千葉大学の卒業論文の調査中に、戸台に分布する戸台層の中の黒色泥岩層から、赤石山

2013年10月30日受付、2014年1月27日受理

* 〒198-0025 東京都青梅市末広町2-5-20

Suehiro-cho 2-5-20, Ome city, Tokyo, Japan

E-mail: ezww 04402@nifty.com

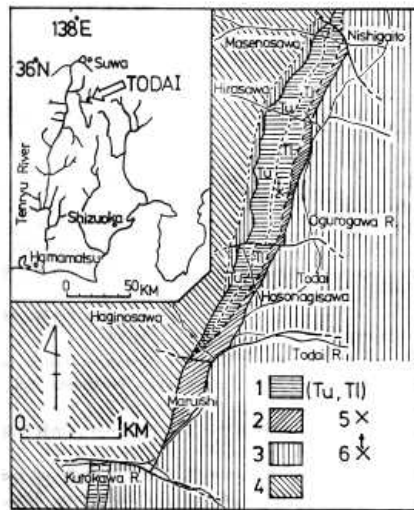


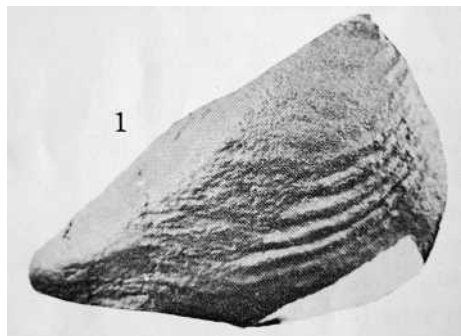
図1. 戸台地域の地質略図（田代ほか，1986に加筆）。

1：戸台層（Tu：上部層＝*Trigonia*、*Ammonite*などを数か所で産出，Ti：下部層＝諸化石を産出），2：小黒川層，3：秩父帯，4：三波川帯，5：小黒川層の化石産地，6：三角貝砂岩層露頭。

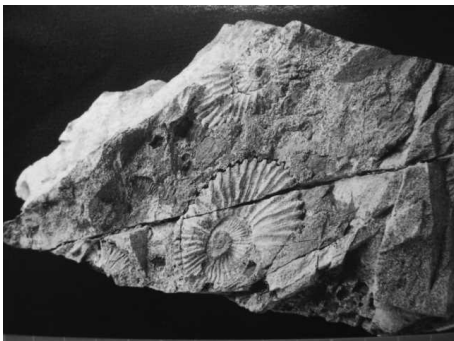
2-1



2-2



2-3



2-4



図2. 代表的な「戸台の化石」。

2-1：プテロトリゴニア・ボシリフォルミス *Pterotrigonia* (*Pterotrigonia*) *pocilliformis* (Yokoyama) 長径7.0cm.

2-2：ニッポニトリゴニア・サカモトエンシス *Nipponitrigonia sakamotoensis* (Yehara) 長径6.0cm. (2-1, 2; Maeda and Kitamura, 1964による)。

2-3：密集して産出するアンモナイト（4～5 cm 径）にウミユリ（数 mm 径）の破片が重なっている。

2-4：歩帯を見せるウニ化石（3～4 cm 径）（2-3, 4：1993年発行，地域学習パンフ「戸台の化石」による）。



図3. 1963年3月31日、筆者が初めて発見した戸台層産のアンモナイト（直径4～5cm）。

地で初めての *Ammonite* を発見した（図3；Maeda and Kitamura, 1964；前田・北村, 1965）。その後、戸台層からは、頭足類、二枚貝類、巻貝類、掘足類などの軟体動物や棘皮動物のウニ類やウミウリ類、腔腸動物のサンゴ類をはじめ、原生生物や多種のシダ植物、生痕などの化石を多量に産出している（北村ほか, 1979；北村, 1981～1985；田中, 1984；北村, 1986；Kimura and Aiba, 1985, 1986）。

戸台層の地質時代は、上部層から見つかる頭足類化石相から考察すると、中生代白亜紀前期宮古世前期の後半、すなわちアプチアン後期の後半である（北村ほか, 1979）。戸台層は、1億2000万年前ころにアジア大陸東岸近くの浅海で堆積した地層である。また、当初の戸台層の下部層は、領石型動物化石の発見により、白亜紀領石世後半、つまりオーテリビアン後期の後半であることが明らかとなり、戸台層から独立させて小黒川層と呼称されることになった（田代ほか, 1986）。

2. こうして保存活動が始まった

筆者は「戸台の化石」に1961年以来かわり続け、これを恒久的に保存したいという希望を持っており、1966年には上伊那郷土研究会誌「伊那路」に戸台産の「三角貝」を紹介した（北村1966a, b, c）。また、1970年から1986年までの17年間にわたり、筆者が勤務していた明星高校地学部（東京都府中市）の活動として合宿学習会を実施し、戸台層から産出する化石を採集・整理・保管し、地質学・古生物学的調査を続けていた（北村, 1981～1995）。

そして1978年から、筆者は地元地域への啓蒙を目的とし、上伊那郷土研究会誌の「伊那路」で「『赤石山地のアンモナイト』—戸台層から発見して15年—」（北村, 1978）、「長谷村の化石—自然史の重要資料と

して地元保管したい—」（北村, 1979）、「戸台のサンカクガイ化石」を公表した（北村, 1982）。また、伊那史学会誌「伊那」にも、「赤石山地のアンモナイト」を公表した（北村, 1981）。さらに、信州大学でおこなわれた「信州の地質構造発達史をめざして—その2（中・古生界シンポジウム）」に参加し、「赤石山地秩父帯白亜系戸台層」について紹介した（北村, 1983）。

1980年代になると、「戸台の化石」の情報が一般・マニアへと流され、旧長谷村戸台地区でも化石の乱採集が心配になった。また、1985年には、伊那谷全体を丸ごと学習の場、そのまま自然博物館と考え、地域の特色を活かした観察学習をして、伊那谷の自然を愛する同好者の会として、「伊那谷自然友の会」が発足した。旧長谷村の「戸台の化石」も伊那谷の自然の一部であり、「戸台の化石」保存会とした筆者らの団体名称の確定には、伊那谷自然友の会の関係者の意見も参考とした。

ちょうど同年夏には、日本地学教育学会主催の北欧巡検が実施された。筆者もこれに参加し、観察地の一つとしてスウェーデンのアルノン島に行き、そこで体験したノーハンマーでの岩石鉱物採集や、小さなレストランで見たささやかな「地域の岩石鉱物展示コーナー」などに、たいへん刺激された。そして、この頃から「戸台の化石」の保存活動を何とか形にしたいとの気持ちを強くした。

筆者は、化石が私物化されたり、商品化されたり、大きな博物館や大学に仕舞い込まれたままになったりするのでなく、埋蔵文化財と同じように地元で守られるべきだと考えていた。とにかく、化石を個人で持ち帰ることを無くし、地元で標本をまとめておけば、興味を持つ有志や地元の住民の方々によって整理・収蔵され、地域の教育資源・学術資料として恒久的に保存され、活用されるだろうと思っていた。そして、地域の子どもはもちろんのこと、遠くから訪れるマニアや研究者の皆さんの目にも触れる施設が地元でできたらなどと、夢を描いていた。

そんな時、過疎化が進む山村「長谷村」では、村おこしのために「山村の自然を活かして」「山村の生活と資源」などの学習会や講座が企画され、住民への呼びかけが盛んに行われていた。1986年、筆者は村おこし活動に取り組む若い役場職員の一に出会い、「『戸台の化石』は村の貴重な資源である」との筆者の想いを語った。早速いろいろな角度からの検討が始まり、行政・地主・有志などの意見も取り入れて、運営委員会の設置と保存会発足を検討した。運営委員としてどんな立場の皆さんにお願いするか、地主である森林生産組合からの意見、事務局をどこに設置するのが大切

か、化石採集に興味を持って参加してくる皆さんの意見などをどのように取りまとめていくか、など様々な意見の交換の後、村長との対談、化石の新聞紹介、一般募集での学習会の企画へと発展した。

そして、同年11月9日（日）、「戸台の化石」第1回学習会が開催された。催物案内が地元新聞などにも掲載され、当日は地元の長谷村住民だけでなく周辺地域や県外からも、小中学生を含む家族連れ、地域の研究者（伊那谷自然友の会や上伊那郷土研究会など関係者）、小中学校の教師、化石マニアなど70余名の参加者が集まった（図4）。



図4.「戸台の化石」第1回学習会（1986.11.09）。

3. 持ち帰れない「戸台の化石」

学習会開催にあたり、筆者は、主催者として「戸台の化石」の紹介、お願い、考え方について、以下のように説明した。

「化石標本は、参加者皆さんが家に持ち帰るのでなく、この戸台の地元長谷村でお預かりしたい。皆さんが化石をそれぞれ持ち帰ってしまうと、『戸台の化石』が散らばってしまい、その全体像がとらえられなくなってしまう。採集者の皆さんが名前を書いて預けてくださることにより、集積された化石標本から、それが少しずつ分かってくるであろう。学習したい人や研究したい人は、この長谷村に来れば、『戸台の化石』のすべてを観察できるようにするために、協力して戴きたい」と呼びかけた。そうしたところ、参加した小学生の可愛い「賛成！」の声が聞こえた。このことは本当に未来へ向けての大きく強い力だと感じ、これで大丈夫だと思った。そして「皆さん、これから成長する小学生が賛成しているのだから、ご理解ください」と説明を終えて、「戸台の化石」の採集が始まった。

現地案内をしながら、筆者は、「いつの日かあの子どもたちに、記名した標本を資料室（子どもたちは博

物館をイメージしたと思われる）で見てもらえるようになる」ことを想像した。無事に学習会を終え、「化石を持ち帰るのでなく、地元でまとめて保存したい」という呼びかけに、小学生の賛同を得たことは、保存会の考え方や活動の礎となり、保存会発足の大きな力となった。後にこれは「戸台方式」と呼ばれることになった。

4.「戸台の化石」保存会発足

第1回学習会を実施した後、あらためて運営委員の推薦・選出を行い、翌1987年4月の第1回運営委員会で保存会組織や活動などについて協議検討した上で、翌5月に「戸台の化石」保存会発足式が催された。

保存会発足に当たっては、地域を含む先輩組織である「伊那谷自然友の会」が精神的バックとなり、また、地域の人的経済的バックとしては、旧長谷村教育委員会の存在が極めて大きかった。また、多くの化石産出地が分布する小黒川の右岸斜面の広大な森林が旧長谷村黒河内森林生産組合の共有林であることから、組合員の方々に運営委員として保存会への参画をお願いした。化石産出地が個人所有地でなかったことは、本保存会のその後の活動に大変幸いであった。

それ以来、運営委員会を年に1回以上実施し、委員の動静（候補推薦・委嘱など）、保存会の活動事業、学習会の企画・実施・まとめ、諸必要経費の計上状況などを検討している。そして、毎年5～6月に室内学習会や先進地施設見学研修会などを行っていたが、2003年の第50回学習会からは、「三峰川石ころウォッチング」を企画し、化石を学ぶための基礎学習として、岩石・鉱物に触れて学ぶようにした（図5）。毎年7月には運営委員と事務局職員による化石産出地への作業道整備と交流会・職員の研修会などを行っている。8月には、2002年までは2泊3日の合宿



図5. 第62回学習会「三峰川石ころウォッチング」。



図6. 第75回学習会 化石採集の様子 (2011.08.03).

形式で化石学習会を実施していたが(小松・北村, 2002), 2003年以降は8月と11月に日帰り形式での化石(採集・整理・観察)学習会を実施している(図6). よって現在, 「戸台の化石」保存会が一般参加者を募集して実施する学習会は, 年間を通じて6月, 8月, 11月の3回である.

出版関係では, 1991年8月に, 当時の寺澤章夫運営委員(故人)の提案により, 「戸台の化石」保存会機関紙「アンモナイトだより」を創刊し, 2013年4月20日には第77号を発行した. さらに1993年には, 長谷村学習パンフ『戸台の化石』を企画・作成した. それ以後2002年まで10年間にわたり, 村内の各種学習パンフ18点を出版した. これらは, その後も増・改定版を重ね, 現在も伊那市長谷地区の地域学習に活用され, 好評を得ている.

5. 「戸台の化石」資料室の建設

1980年代には, 自然史や化石をテーマとする博物館や資料館が各地に設立された. 「戸台の化石」保存会では, 地元に博物館を設立したいと考え, 10年余りにわたり毎年各地の先進地施設見学研修会を実施し, 運営委員や会員有志などで, 戸隠村地質化石館・豊橋市自然史博物館・茅野市八ヶ岳総合博物館・瑞浪市化石博物館・阿南町化石館・福井県立博物館・信州新町博物館・長野市立茶臼山自然館・長野県立歴史館・群馬県立自然史博物館・中里村恐竜センター・青海町自然史博物館・糸魚川市フォッサマグナミュージアム・いわき市石炭博物館・同アンモナイトセンターなどを訪ねた.

1988年, 「戸台の化石」保存会は「学習会ごとに参加者が採集して, 預かってきた化石標本について, その保存場所を設けたい」ということで, 村内の旧長谷村保育園施設を借用して, ささやかな「戸台の化石」

資料室を開設した(北村, 1990).

さらに1999年には, 「戸台の化石」保存会も参画して旧長谷村に博物館建設検討委員会が設置された. 地域にふさわしい施設が望ましいとの意見に集約され, 道の駅「南あむら はせ」や, アルプス林道バス発着所(仙流荘)などに展示施設を建設しようという意見も出された. しかし, 集客力や管理スタッフの確保などが懸念された. また, 埋蔵文化財や民俗資料などの収蔵保存などにも総合的に対応できる施設の必要性も求められていた. そして, 数年間の調査研究の上で審議を進めた博物館建設検討委員会は, いわゆる博物館ではなく, 生涯学習活動施設としての長谷公民館に埋蔵文化財・古文書・民俗資料などと共に, 「戸台の化石」標本を収蔵・展示する施設を併設することという結論となった.

こうして2005年11月に「戸台の化石」資料室が新設された(北村, 2007). 「戸台の化石」を紹介展示する常設展示は保存標本の紹介のみである(図7). 学習会などでの採集標本は, 整理・登録して, 収蔵庫に保存している(図8). また, 関係団体施設での標本展



図7. 長谷公民館に併設された「戸台の化石」資料室.



図8. 収蔵庫には, 採集標本が整理・登録され保存されている.

示や研究者・学生からの標本検討・産出地の紹介希望などにも適宜対応している。

また同年、「戸台の化石」保存会の活動も20年が経過し、今後の活動をどのように継続させていくか、運営委員の動静・事務局の体制・予算決算・学習会への参加者確保・記念事業の企画などが運営委員会で検討された。

6. 南アルプスジオパークの日本ジオパーク認定と新たな取組み

2006年度には、旧長谷村が伊那市と合併して、新しい地域作りが始まった。すでに動いていた県・市などの連携による「南アルプス世界自然遺産」登録申請への推進運動の中で、日本ジオパーク認定への活動が進められた。そして「戸台の化石」保存会の20数年の継続した活動という大きな成果により、2008年12月には「小黒川沿いの戸台層—アンモナイトや不思議な礫岩—」と「戸台の化石」資料室（長谷公民館内）をジオサイトの一つとした南アルプス（中央構造線エリア）ジオパークが、日本ジオパークとして認定された。

「戸台の化石」保存会は、南アルプスジオパーク協議会の運営に参加し、諸活動に参画することとなった。それに伴い、2008～2013年にかけて、伊那市市民大学、ジオパーク知識アップ講座、ジオパークガイド養成講座、ジオキャンプ、学校ジオツアーや関係者の研修会などに協力した。また、ジオパーク活動の発展により、「戸台の化石」資料室への日常的な見学者が増え、学習会への参加申込者の増加や問合せなども増加した。

さらに、伊那市・富士見町・大鹿村・飯田市によるさまざまな活動と取り組みが大きな輪となって、2013年1月には日本ジオパークとして再認定を受けた。

こういった新しい活動が広がる中、保存会は25周年を迎えた。2011年11月12日には「戸台の化石」保存会発足25周年記念式・講演会・祝賀会・第76回学習会を開催し、下記の「戸台の化石憲章」を採択した（北村、2013）。

戸台の化石憲章

海に生活していた昔の生物の化石が、海拔千メートル以上の戸台地区から産出するという不思議な大自然の営みに思いをめぐらし、南アルプスの麓の宝物を永く語り継ぎ、守り続けていくために戸台の化石憲章を定める。

- 太古のロマンを秘めた化石に接し、地球の成り立ちを知ろう

- 採集した化石は持ち帰らず、地元で保存する戸台方式を守ろう
 - 化石の標本は「戸台の化石」資料室に保管し、学習および研究教材に活用しよう
 - 「戸台の化石」を愛し、地域の誇りにしよう
- 平成23年11月12日

7. 保存会活動の成果と今後の課題

標本の地元保存を訴えた「戸台方式」は、地元の皆さんや有志の支えにより徹底遵守されている。これには、地域の小・中学生の家族連れでの参加を奨励したことも功を奏している。また、保存された標本を収蔵・展示する施設が建設され、「戸台の化石」の学習会が公民館活動としても定着している。保存会発足当時は採集活動が盛んになると、いずれ化石がなくなり、活動ができなくなるのではとの心配もあった。しかし、現状ではさらに10年、20年を経過しても活動を継続できる見通しである。また保存会の発起人として嬉しいことに、活動初期の参加者が親となって子どもを連れて、再び参加するようになった方がいること、専門的研鑽を積んで研究者や関連分野で活躍している方がいることが挙げられ、確実に活動の成果が次第に大きな輪へと広がっているといえる。

今後については、世界自然遺産登録・エコパーク認定・世界ジオパーク認定などに向けて、新たな取組みや住民参加の安定した活動の定着が求められる。学習会での新たな取組みとしては、化石のレプリカづくりがある。「戸台の化石」保存会の学習会では、自分で採集した化石を持ち帰れないので、最高の記念品となる。最近では極めて簡単な作業でそれなりのレプリカができる図工科教材のゴム質の材料が安価で入手可能である。しかも、これはストラップにもなる。2013年夏の第81回学習会で試験的に、このレプリカづくりを実施したところ、大好評であった。また、伊那市創造館企画の夏休みのイベントでも、いくつかの学習テーマの中で最も人気があった。

一方、資料管理では、学習会参加者が採集した1万点に達する化石標本が「戸台の化石」資料室に保管されているが、2013年1月から標本ラベルの更新とラベル記載などの電子データ化作業が進行している（図9）。

今後の保存会の活動について、以下のような課題を抱えている。

- (1) 運営委員会委員の推薦と確保、会員の確保と維持。

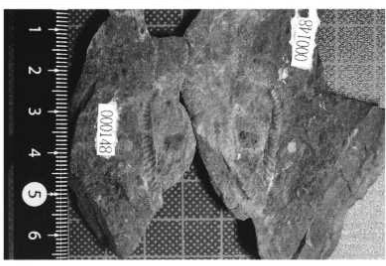


「戸台の化石」資料室 標本管理カード

保管場所

ア-1

003



標本NO

000148

種類(綱, 目, 科)

頭・アンモナイト

採集場所

戸台A2

採集年月日

採集者氏名

個体数:面数:破片

2 個

2 面

コメント

大きさ (長さ・短径) [mm]			殻 内外殻:100 外殻:200 内殻:300		産出状態(形状) 一個体:100 大部分:200 小部分:300 破片:400 gg句集 300		立体的:10 つぶれ:20 平面的:30 斜潰れ:40 縦つぶれ:50 横つぶれ:60		腹側面:01 右側面:02 左側面:03 左右面:04 背側面:05	
(殻長)	(殻幅)	(殻高)								
27	4	1								

肋の巻き方 正常巻:100 異常巻:200 (月状:300) (棒状:400) (筒型:500)			肋の有無・形状 有・密:100 有・疎:200 強弱あり:300 無:400 太い肋:500 細い肋:600 強い肋:700 弱い肋:800			頭足類(アンモナイト) 直線的:10 緩曲的:20 急曲的:30 間隔くびれ:40 平行肋:04			いぼの有無・形状 有:100 無:200			腹側の形状 側面一列:10 側面二列:20 腹側面:25 とげ状:30 長棘状:40 平行肋:01 平滑面:02 溝状:03 電骨状:04			臍径(長さ) [mm]		臍径/殻径[%]	
2つ折れ:01	3つ折れ:02																	

学名(属名・(亜属名)・種名・亜種名・命名者名・命名年)

発行:「戸台の化石」保存会

2013/5/27 11:36

図9 電子化された標本管理カード(試作されたアンモナイトの例)。

- 事務局組織の維持, 諸経費と予算決算, 学習会参加費と会費。
- 学習会活動の企画実施と継続, 地域小中学校からの参加者確保。
- 保存標本のクリーニング作業と標本管理カードの作成と管理。
- 化石産出地および産出層の調査, 作業道の確保と管理入山管理, 案内板設置。
- 収蔵施設の管理(事務・標本の貸出・収蔵庫への入室管理)。

保存会では, これらの課題に取り組み, 会の活動を継続・発展させていきたい。そして, 「戸台の化石」を通じて地域の子どもたちへの自然史学習の啓蒙宣伝, 保存会機関紙「アンモナイトだより」の編集と発行などを通じて, 学習会参加者初め地元地域の皆さんや有志・会員の皆さんに一層ご理解とご支援をいただき, 保存会活動がさらに永く発展していけるようにしたいと考えている。

謝辞

「戸台の化石」保存会の紹介につきましては, 化石研究会主催下仁田町自然史館共催によるシンポジウム「ジオパークにおける化石について～地域の宝をどのように残していくか～」での事例報告として発表の機会を与えて戴いた。後日事務局より化石誌講演録原稿をとのお話があり, 群馬県立自然史博物館高桑祐司氏ならびに査読者には未熟な粗稿の体裁改善にあたり, 身に余る適切なお意見ご指導をいただいた。下仁田町ジオパーク推進室関谷友彦氏には終始諸般にわたりお世話になった。ここに改めて厚くお礼申し上げる。

引用文献

- 保科百助(1903) 通俗滑稽信州地質学の話。信濃毎日新聞, 7285(2月2日), 長野。
- 石井清彦・植田良夫・島津光夫(1953) 長野県赤石山系の地質および岩石。日本岩石鉱物鉱床学会誌 **37**, 23-130。
- Kimura, T. and Aiba, H.(1885) Discovery of *Weichselia reticulata* (Stokes et Webb) from the Lower Cretaceous Todai Formation, in the Outer

- Zone of Japan. *Proc. Japan Acad.* **61**, B, 356-358.
- Kimura, T. and Aiba, H. (1986) *Onychiopsis yokoyamai* (Yehara) comb. nov. from the Lower Cretaceous Plant-beds in the Outer Zone of Japan. *Bull. Natn. Sci. Mus. Tokyo* C, **12**(2), 41-52.
- 北村健治 (1966a) 古白亜紀の化石「三角貝」を訪ねてその1. 伊那路 **10**(2), 06-10.
- 北村健治 (1966b) 古白亜紀の化石「三角貝」を訪ねてその2. 伊那路 **10**(5), 24-29.
- 北村健治 (1966c) 古白亜紀の化石「三角貝」を訪ねてその3. 伊那路 **10**(7), 1-7.
- 北村健治 (1978) 赤石山地のアンモナイト化石—戸台から発見して15年—. 伊那路 **22**(12), 1-7.
- 北村健治 (1979) 長谷村産の化石—自然史の重要資料として地元保存したい—. 伊那路 **23**(6), 10-19.
- 北村健治 (1981) 赤石山地のアンモナイト. 伊那 **29**(11), 1-4.
- 北村健治 (1982) 戸台のサンカクガイ化石. 伊那路 **26**(1), 36-44.
- 北村健治 (1983) 赤石山地秩父帯白亜系戸台層. シンポジウム世話人会事務局編 信州の地質構造発達史をめぐって(その2). 44-47頁, 地学団体研究会, シンポジウム世話人会, 松本.
- 北村健治 (1990) 「戸台の化石」保存会のその後. 伊那路 **34**(6), 36-38.
- 北村健治 (1995) 戸台層・小黒川層の化石と地質時代—白亜系戸台層の地質学的研究—その15—(1981~1995年間調査研究のまとめ). 明星学苑研究紀要 **15**, 1-41.
- 北村健治 (2007) 「長谷地区」文化財などの収蔵施設完成. 伊那路 **51**(6), 19-22.
- 北村健治 (2013) 戸台の化石保存会 25周年記念式を終えて—「戸台の化石憲章」を採択. 伊那路 **57**(6), 1-7.
- 北村健治・松川正樹・小島郁生・松本達郎 (1979) 赤石山地白亜系戸台層の時代. 国立科学博物館専報 (12), 55-64.
- 小松俊文・北村健治 (2002) 長野県長谷村「戸台の化石」保存会. 化石 **72**, 48-50.
- Maeda, S. and Kitamura, T. (1964) Lower Cretaceous Trigonids from the Todai Formation, central Japan. *Jour. Coll. Arts and Sci. Chiba Univ.* **3**(4), 47-57.
- 前田四郎・北村健治 (1965) 赤石山地北西部戸台層の層序と構造. 千葉大学文理学部研究紀要 **4**(3), 323-332.
- Matsumoto, T. *et al.* (1954) The Cretaceous System in the Japanese Islands. *Japan. Soc. Promotion Sci. Tokyo*. XiV + 324.
- 佐藤伝蔵 (1919) 赤石山中のトリゴニア産地. 地学雑誌 **31**(36), 263.
- 田中啓策 (1984) 本邦産白亜紀ウニ化石. 地質調査所月報 **35**, 389-417.
- 田代正之・柳澤秀樹・北村健治 (1986) 赤石山地戸台地域からの領石フォーナの発見. 地質学雑誌 **92**, 757-759.
- 矢部長克 (1901) 日本産トリゴニア化石. 地質学雑誌 **8**(99), 545-547.
- Yehara, S. (1921) On some new Species of *Trigonia* from the Lias of Prov. Nagato, and The Cretaceous of Prov. Awa. *Journ. Geol. Soc. Tokyo*. **28**(329), 7-12.
- Yehara, S. (1923) Cretaceous Trigonidae from Southwestern Japan. *Japan. Jour. Geol. Geogr.* **2**(3), 59-84.
- 江原眞伍 (1931) 日本産三角貝. 岩波茂雄, 岩波講座〔地質・古生物〕1-25頁. 岩波書店, 東京.
- 脇水鉄五郎 (1899) 信州美和村のトリゴニア化石. 地質学雑誌 **6**(65), 83.